

新たな社会関係を生み出す「場所」

北インド農村社会における参加型開発を事例に

菅野美佐子(日本学術振興会特別研究員)

「共同体」や「共生」に関する近年の議論では、既存の地域や社会的な制約を超え、ある明確な目的を実践する人々が集い、つながる「場所」に着目する傾向がみられる。人やモノの移動の増加、通信手段の発達、経済活動ベースの生活、社会的規範の脆弱化など様々な要因が考えられるが、今日では国や地域を問わず、各人が他者とのあいだに新たな社会的つながりを作りやすい状況が生み出されている。つまりこうした状況において、新たな共同体や社会関係構築の各地域社会での位置づけおよび影響は興味深いテーマのひとつであるといえる。

そこで本発表では、現代インド社会に焦点を当て、人と人とのつながりが形成され強化される場としての参加型開発について考察する。英国植民地からの独立以降、インドの民主主義が目指したのはカースト制度の廃止や貧困の緩和、男女の平等など、格差の撤廃であった。それらを実現へと導くために政策の一環として取り入れられてきたのが、貧困層や下位カースト層、女性などを巻き込んだ参加型開発プログラムである。

本発表で取り上げるのは、発表者の調査地である北インド、ウツタル・プラデーシュ州ワラーナシー近郊において、インド政府およびNGO、国際機関によって貧困の農村女性を対象に実施されている「マヒラ・サマーキヤ(Mahila Samkhyā)」と呼ばれる参加型開発のプログラムである。もともとこのプログラムは、下位カーストに属する貧困女性の識字教育や収入手段の創出、社会的地位の向上を目的として活動を展開していたが、長年の活動を通じて本来の目的以上の社会的意味をもちつつある。それは、同一カースト同士が強固なつながりをもつ北インド農村社会において、プログラムに集う人々の新たな関係性のもとに形成される、ある種の「共同体」のような存在となり、既存の共同体の特性と重なり合いながら人と人との新たなつながりをつくり出しているということである。また、マヒラ・サマーキヤの場合、そのつながりをつくる担い手が従来のように男性中心ではなく女性を主体としており、当該社会のジェンダー関係の変容にも何らかのきっかけを与えているといえる。

本発表では、こうした活動がいかにして人々の新たな関係性を生み出すのかを、マヒラ・サマーキヤの活動のなかでも女性の政治参画という動きから捉えたい。発表者の調査地では、5年に1度、村落議会委員の選挙が実施されており、本プログラムでも女性の議会政治への参加に向けて、プログラムの会員たちが選挙に立候補するための推進活動を行っている。北インドでは政治とカーストは密接な関わりをもち、投票者は同一カースト内の立候補者に投票するケースが多い。したがって、人口の少ない上位カーストに比べて、人口の多い下位カーストの立候補者が票獲得の上では有利な状況が生み出されている。

一方、マヒラ・サマーキヤの女性たちは、活動のなかで育まれたメンバーの相互的な信頼性や親和性を通じて、異カーストの候補者に対する票獲得のための支援活動を始めた。しかもそれは、プログラムにおける関係性を超え、メンバーである女性の親族やカースト・コミュニティという既存の社会関係にも影響をおよぼしている。また、これらの動きはプログラム側によって仕向けられたものではなく、メンバー間の個別な関係性によって紡ぎだされた自発的な取り組みである。つまり、女性たちは参加型開発プログラムの意図や目的を巧妙にずらすことで自らの目的達成の媒体として活用すると同時に、それを既存の「共同体」内部の関係性や仕組みに積極的に移行しようとしているのである。

北インド農村社会にみられる以上の状況を踏まえて、本発表では新たな共同性を生み出す「場」としての参加型開発に関連する事例やデータを提示しながら、それらの分析を通じて当事者間で形成される関係性の社会的意味と、それが冒頭で述べた「共同体」や「共生」といった議論にどう位置づけられるのかについて考察を加えたい。

【 インド、開発、ジェンダー、共同性 】